



有松まちづくりの会 部長会 (8月18日)

有松の日本遺産の認定について、7月末に文化庁から「再審査」と評価され、名古屋市担当部署と地元有松の諸団体との取組みの見直しが早急になされています。まちづくりの会としても、有松の歴史や文化を観光振興につなげ、多くの来訪者を迎えられるよう協力していく旨を確認しました。



まちの風景 松柏苑

有松天満社秋季大祭(山車まつり)ポスター完成

今年のポスターは2種類。内1枚は、地元有松小・中学校出身で漫画家の有馬ツカサさんが描かれたもの。絞り柄の装いが祭り気分を盛り上げています。この新作アニメポスターが若者の心に届くことを願っています。

8月2日にお話を聞く機会がありましたので、紹介します。

「これまで小説を漫画にする仕事をしてきましたが、今回オリジナル作品を出すことになりました。アーチェリー部を舞台としたもので、その舞台を私が育った有松にしたいと考えました。

そんな中で出会ったのが、有松天満社の川勝尚子さんです。アニメでのポスターを依頼されました。私も大人になり”カッコイイ町”と思うようになり、是非とも描きたいと・・・川勝さんから資料をいただき仕上げることができました」

山車まつりに新しい風が吹いて来ていると感じさせられるインタビューでした。



オリジナル作品



新作ポスター

有松天満社 臥牛制作 始まる (7月16日) 於:中町年行司

登場以来、徐々に知られるようになってきた有松天満社のマスコットキャラクター「ウシさん(仮称)」(写真左)。知名度アップを目指して、被り物の制作が始まった。制作者は総代で、自動車メーカーで車のデザインを担当されている鶴田康光さん(写真右)。「ウシさん生みの親の川勝さんから手伝ってと声をかけられて」がきっかけ。この日は頭部分の制作をされていた。貼り合わせを削っていくのだが、「楽しい」とも。10月5日山車まつりにお披露目予定。



奉納 虹色ふうりんワークショップ (8月9日) 於:中町年行司

れいちゃん(3才)親子が作業中です。指導役の総代川上順子さん(写真右端)のもと、プラスチック片に上手にひもを通すなどほとんど独力でやっていました。組み立て部品を細かく用意する配慮にも感心！です。「回覧でWSを知り、思い出作りで参加しました」とお父さん。奉納先の天満社虹橋の場所を聞きながら帰られました。



おてだま作りワークショップ (7月21日) 於:六弦とコットン

"六弦とコットン"手づくり小物の展示販売コーナーに出品している「コミチ comichi レースdeコラージュ」の鈴木道代さんを講師に行われた。和服の見本用古布を使ってお手玉を作るワークショップ、中にはあずきや焙煎後に除かれてしまった珈琲豆を入れていた。今度は小学生を対象に行きたいと・・丁寧な教え方が印象的でした。



2人展「きらきら」(8月2日他) 於:六弦とコットン

友人同士のお二人、一昨年に続いての個展とか。壁面左側には向日葵を描いた中館玲愛さんの、右側にはかうちれいさんの繊細なタッチの作品が展示。アーティストトークでお二人は、展示会テーマ「きらきら」について、"生きて死ぬこと"とか"生命賛歌"とか仰っていた。参加者10人はどんな気分になったかな。



有松伝統文化親子教室2025 (8月3日) 於:竹田家住宅 NPO法人コンソーシアム有松

昨年につき、親子教室が開かれた。今年は、まちなみ散策・歴史講座・建物見学・絞り体験が用意され、希望する2つに参加するというもの。4コース、募集定員は25名。多くは定員に達し、住宅内は多くの小学生と保護者で混み合っていた。有松は絞り産業で栄え、重厚な建物が多く残されている。そこから醸し出される伝統文化が注目されているためか、親の熱心さが印象的だ。



まちなみ散策:案内 有松あないびとの会

《まちなみ案内》 東海道沿いに、江戸から明治時代の建物が多く残る町並みを見学。江戸中期の大火後、防火のため瓦葺き・漆喰塗りの重厚な建物が建てられた/絞り商品を日差しから守るための土庇がある/明治以後、問屋に業態転換し、店には格子がはめられた などに気づかされた。日差しが強く、土庇を渡り歩いて山車会館に向かった。展示の神功皇后車に見とれていた。



歴史講座:講師 竹田嘉兵衛氏

《歴史講座》 竹田嘉兵衛さんの小学生時代の体験話を私語もなく聞いていた。戦後の一時期、有松で絞り産業が出来なかった苦しい時代のことや、現在は洋装に合わせた商品が次々と生み出されていることなど、有松と絞りの歴史が豊富なスライドとともに語られていた。



建物見学:講師 野口和樹氏

《建物見学》 暑さのため外観の説明を圧縮して、特徴ある室内の説明を伺う。洋間では壁紙や天井のしつらえの豪華さに参加者は撮影に忙しい。また、この部屋からの庭の眺めは、最高! 枯山水庭園を詳しく説明いただいた。

《絞り体験》 参加者の一番人気は絞り体験です。小ぶりの布バックを絞るのです。一人一人思い思いに布地を折りたたんだり布をギュッと塊にしたりして糸で固く絞ります。お子さん以上に保護者の方が出来栄のいい物を作りたいとの思いが伝わってきます。早恒染色で藍色に染め、お持ち帰り。



絞り体験:講師 竹田昌弘氏,久野剛資氏

今求められる 旧家の活用を考えるシンポジウム (8月9日) 於:竹田家住宅

有松の絞り商家の代表的な建物・竹田家住宅を会場に、その書院や蔵、茶室「栽松庵」の価値を再認識し、今後の活用について考える会があり、全国から50名ほどの方が参加され意見交換されました。また、建築家の三井所氏はじめパネリストの皆さんから数々の提案や耐震補強などについても、日本間ならではの仕様があること等、事例を交えてご教示があり、なるほどと思わされました。「古民家」ではなく「旧家」と題したところに、有松のストーリーが感じられました。

主催:NPOコンソーシアム有松



特集 戦後80年 戦争の記憶 in 有松

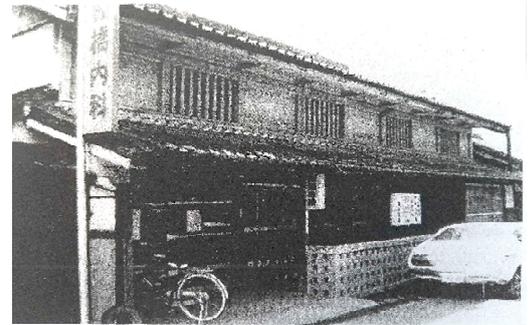
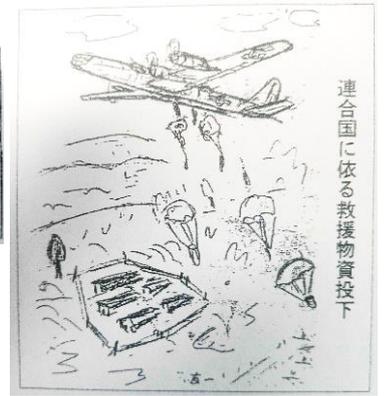
戦後80年の節目の年、新聞やテレビなどで関連する報道がされているが、確実に戦争の記憶は風化してきている。

有松駅近くに捕虜収容所があったことを知る人も少ない。かつて故成田治氏が、捕虜たちが死んだ仲間の棺を大八車に載せて、火葬場に向かうのを目撃したと回顧していた。福岡友一氏は、同級生等の話を参考に、米軍機が救援物資を収容所目掛けて投下する絵を描いている。(有松まちづくりの会会報「有松」第50号参照)

また、有松の町医者故棚橋龍三氏は嘱託医として捕虜の診察・治療に、捕虜の米兵軍医と共にあたった。戦後、捕虜への「灸(きゅう)」が虐待と見なされそうになったが、米軍医の証言で不起訴となった。この事実は10年ほど前に娘の恭子さんにより語られるようになった。今もその米軍医が友情の証として龍三氏に渡された指輪が残る。

有松の捕虜収容所が広く知られるきっかけとして、名古屋市出身の小説家城山三郎氏の「捕虜の居た駅」(1961年発表)がある。

収容所の存在を広く知らしめ、遺構を残す活動に尽力されている脚本家で元南山国際高校・中学校教諭である馬場 豊氏の講演は時を得たものであった。



講演会「捕虜収容所から見る戦争」講師 馬場 豊 (8月7日) 於:中日文化センター(栄)

暗く重いテーマにも関わらず60名程が参加。学びの熱気にあふれていた。有松からの参加者も少なくなかった。

今から15年程前「捕虜の居た駅」を知り、長らく書籍化されていないこの作品を世に広めるべく朗読会開催(俳優 天野鎮雄)を進めた。収容所や有松のことを深く知るにつれ、より広く知って欲しいと戯曲「捕虜のいた町」(2017年)を出版。その過程で、棚橋恭子さんとの出会いがあり龍三氏のことを知る。物語完成までの取材で明らかになったエピソードを交えながらの語りであった。

◆ 名古屋捕虜収容所第2分所(鳴海分所)のこと

終戦時273人が収容され、熱田の日本車両で車両製造などに従事。劣悪な環境で22人が死亡。戦後、戦犯として23人が有罪に。右図面は鳴海分所建物配置図。(詳しくは、有松かわら版第171号参照)

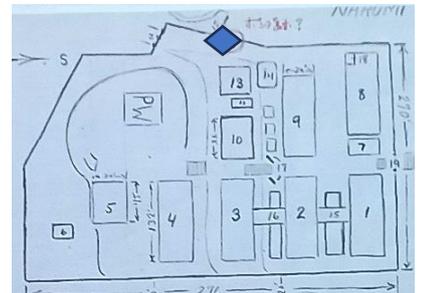
◆ 棚橋龍三氏のこと

棚橋恭子さんは、戦後長らく龍三氏が収容所で捕虜の診察に当たっていた事は話さずにいたが、馬場さんの想いを汲み初めて話されるようになった。最後に、昨年CCNetで放映された「埋もれた戦争の記憶を辿る」を視聴したが、そこでも捕虜の軍医さんとの充実した仕事ぶりを話題にしていた。

改めて、愛知県に唯一設置された捕虜収容所が地元有松にもたらした影響を後世に語り継いでいかななくてはと考えさせられた講演であった。

あらすじ
戦後十数年目の有松駅で「ぼく」は、向かい席に座った女性に目を留める。大戦末期、勤労学徒として駅の改札係をしていた女学生だった。自身も熱田区の鉄鋼工場へ動員されていた。毎朝の通勤時、同駅裏の収容所から使役先の工場へ移送されていく捕虜の姿があった。付き添いの下士官兵らによる日常的な暴行、無表情に見つめる大人たち。女学生の後ろ姿から、その光景を自分と同様に嫌悪しているのが感じられた。淡いあこがれを抱きつつ、志願した海軍への入隊時に駅頭で女学生に見送られることを期待していたが――

「捕虜の居た駅」 あらすじ



鳴海分所 建物配置 ◆遺構ポンプ所跡

ちょっといい話 井桁屋の賞牌

現在、大阪・関西万博が開かれ多くの人々が訪れているという。今から125年前1900(明治33)年のパリ万国博覧会に有松絞りが出品されたことをご存じだろうか。

当時、有松絞商工業組合は絞り技術の粋を集めて優秀な綿布絞を出品し、多くの受賞者*を出した。井桁屋正面を入ると、店奥の右手に受賞碑が掛けられている。

* 服部孫兵衛・小塚助三郎・久田伊左衛門・竹田嘉兵衛・川村弥平・服部清蔵

(「有松よもやま話」第8号参照)



連載 有松にお店を構えて ⑨ Rocca 革を絞る

名古屋市町並み保存地区第1号指定を記念した紹介板横にある、お洒落なお店に寄ってみた。

▶ どうして有松にお店を構えることにしたのですか？

これまで10年間にわたり"革を絞る くくる"として営業してまいりましたが、昨年4月より体制の変化に伴い、店舗名及びブランド名を"Rocca"へ刷新、新たな一步を踏み出しました。わたしたちは「温故創新」の理念の元、古き良きものに学び、新しい価値を生み出す、皮の絞り染めに特化したものづくりに取り組んでおります。



▶ これまでのご苦労や喜びは？

日々ものづくりを通じて、たくさんのお客様から暖かい応援をいただき、心より感謝しております。私たちは、デザイン・絞り染め・縫製・仕上げに至るまですべての工程を自分たちの手で行っています。時間と手間がかかりますが、手を動かし、心を込め、完成した瞬間の達成感。お客様に手に取っていただいた時の笑顔。それこそが、私たちの喜びの原点です。これからも精進してまいります。



▶ これからのこと、こんな町になって欲しいという願いは？

手仕事のぬくもりが、日々の暮らしにそっと寄り添う。そんな町でありたいと願っています。作り手と使い手が言葉を交わし、伝統と新しさが響きあうような…

営業時間

10:00~17:00

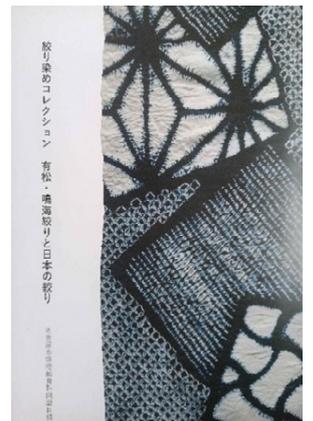
土・日曜日営業

本の紹介「絞り染めコレクション 有松・鳴海絞り」と日本の絞り」

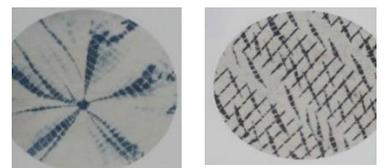
名古屋市博物館資料図版目録11 編集・発行 名古屋市博物館

博物館が収集した有松・鳴海絞りを中心とする日本各地の絞り染めコレクションが掲載されている。その多くが有松・鳴海地区で行われている絞り染めであり、江戸時代から現在まで途切れることなく続き、今では伝統的工芸品に指定されている。

消耗品として使用される着物類はなかなか収集の機会に恵まれないが、近年著名な収集家からまとまった絞りコレクション(絞りの着物・布類)を購入することができたようだ。是非とも手に取っていただき有松・鳴海絞りの奥深さに触れて欲しい。



〈有松・鳴海絞りとは〉 江戸時代尾張藩の庇護のもと絞り業が発達し、蜘蛛絞り(写真左)や三浦絞りなどの技法が行なわれていた。明治以降は様々な技法が考案され、丸太を用いる嵐絞り(写真右)や化学染料の普及で雪花絞りが生み出された。量産に適した技法である。絞り技法の種類が多く、また技法を組み合わせ新たな模様を作り出しているのも特徴といえる。



催事・行事予定

- 9月7日(日) 15:00 第18回寿限無茶屋で上方落語 九雀亭 寿限無茶屋
- 9月13日~10月26日(土日のみ) 東陵中学校「藝探展」 川村家東蔵・岡家住宅
- 9月15日(月・祝) 有松絞親子体験教室2025(第2回) 申申居 NPO法人コンソーシアム有松
- 9月21日(日) 17:00~ トワイライトJAZZライブ 寿限無茶屋 有松町家ライブ
- 9月22日(月) 18:00 有松町並み相談会 有松コミセン
- 9月29日(月) 18:30 有松まちづくりの会役員会 有松コミセン



発行者 中濱 豊(有松まちづくりの会 会長)

編集者 加藤明美(有松まちづくりの会 広報部長)

pegasusb@mc.ccnw.ne.jp 取材・撮影 伊藤総俊

有松まちづくりの会は新規会員を募集しています。(年会費1000円)

詳しくは上記アドレス又はお近くの会員までお問い合わせください。

有松まちづくりの会はホームページを公開しています。「有松のまち」で検索。

「有松かわら版」をカラーでご覧いただけます。

《編集後記》

戦後80年の節目の年、有松も決して戦争と無関係の地ではなかった。戦争末期、有松駅近くに捕虜収容所があった。特集記事をご覧ください。特に捕虜の診察にあたった町医者と捕虜の軍医との友情物語は一服の清涼剤。語り続けていきたい。